

北東アジア天然ガス・パイプラインフォーラム (NAGPF)

ERINA 調査研究部長・主任研究員
新井洋史

北東アジア天然ガス・パイプラインフォーラム (NAGPF) は、1995年に設立された国際 NGO で、北東アジアにおける天然ガス分野での協力を促進するため、専門家らによる意見交換や共同研究などの活動を実施してきている。筆者は現在、NAGPF の事務局長としてこの活動に参加している。NAGPF では、中核的メンバーによる理事会を年1回開催しており、今年は2017年8月24日にモスクワで開催された。理事会では、会の活動・運営に関

することを議論するほか、各国の天然ガス部門の最新動向などについての情報交換を行っている。以下では、当日の議論の中から興味深かった点を簡単に紹介したい。

ロシアについては、現在の NAGPF 会長でもあるロシア科学アカデミー石油・ガス研究所のアレクセイ・マステパノフ¹ エネルギー戦略・安全保障分析センター長から話題提供があった。同氏は、世界全体が大きなパラダイムシフトの中にあるとの認識

を示し、特に炭化水素資源に関する情勢変化を強調した。かつてローマクラブが石油の枯渇を論じて以降、エネルギー資源は希少なものとみなされてきたが、いまや資源所有者が消費者に対して一方的に条件を押し付ける時代ではなくなった。石油価格は低下し、パリ協定により再生可能エネルギーの普及も進む見通しである。結論として、同氏は、非化石燃料の動向分析が必要であること、科学技術の動向がエネルギーバランスを左右すること、そ

¹ アレクセイ・マステパノフ『「2035年までのロシアのエネルギー戦略」草案の運命』、ERINA REPORT (PLUS) No.137、2017年8月

してエネルギー生産・輸送技術の開発スピードが重要であることの3点を指摘した。全体として、ロシアにとって不都合な要素を強調した報告であった。なお、マステパノフ氏からは、本誌の前号にロシアのエネルギー戦略の策定に関する論文を寄稿いただいているので、関心がある向きはそちらも参照願いたい。

中国からは、中国石油天然気集団経済技術研究院の単衛国市場研究所長が報告を行った。冒頭、2017年上半期のガス需要が前年同期比13.8%増加していることなど、中国国内の足元の天然ガス市場動向が簡単に説明された。長期需要見通しとして、同研究院が最近発表した試算値を引用して、2020年に3340億立方メートル、2030年に5350億立方メートル（いずれも推奨ケース）となり、2015年の実績（1940億立方メートル）の1.7倍、2.8倍に増加するとの数値を示した。問題は、いかにこれだけの量の天然ガスを調達するかである。一つの試算として、国内ガス生産で3200億立方メートル、LNG輸入で800億立方メートル、パイプラインガス輸入で1300億立方メートルを確保するとの構成が披露された。2016年の天然ガス輸入量は、LNG、パイプライン共に210

億立方メートル強であり、2030年にはそれぞれ約4倍、6.5倍に増える計算だ。パイプラインガスの輸入の伸びが大きいとみていることについて、同氏は、標準的なLNG受入基地の受入能力に対して、パイプラインの輸送力が極めて大きい（数倍から10倍）ことを指摘した。同氏は、2000～2013年頃が中国のガス産業にとって古き良き時代であり、今後そのような時代の再現は無いと述べていたが、その意図は「供給が追いつかないリスクがある」というものである。日本のように需要縮小の中で活路を求めて苦しむ事業者にとっては、羨ましい悩みだ。

日本についての報告は、石油天然ガス・金属鉱物資源機構（JOGMEC）の黒須利彦モスクワ事務所長から行っていた。同氏は、東日本大震災後の原発の稼働状況や日本の長期エネルギー需給見通しの概要などを紹介した。また、2016年に資源エネルギー庁が取りまとめたLNG市場戦略において、取引の容易性、オープンなインフラ、需給を反映した価格指標の3要素が重視されていることを説明した。さらに、電力市場に引き続き、ガス市場でも自由化が進みつつあるものの、国土全体をカバーする基幹パイプライ

ン網が未整備であるとの課題を指摘した。

韓国からの報告は、韓国ガス公社ガス経済・経営センターのリユウ・シホ主席研究員が行った。韓国では、近年、石油価格の低下に伴いLPG利用へのシフトが起きていることなどから、LNG輸入量がピークだった2013年を下回る状態が続いている。ただし、新たに発足した文在寅政権は、石炭火力発電の停止を進めており、天然ガス利用が増えつつある。また、脱原発を打ち出しており、仮にそれが実現すれば、天然ガスシフトが進む可能性がある。こうした点では、不確定要素が大きい。ガス調達面では、2024年頃にカタール、オマーンからの長期契約が満了するので、その後の調達が課題となる。試算によれば、その頃には米国からのLNG価格がスポット価格を下回る見込みであり、こうした点を注視していきたい。

今回の会議は、いわば内輪の会議であったが、NAGPFでは来年2018年にロシアがホストとなって国際会議を開催する予定である。そこでは、幅広い関係者の参加を求めることにしており、意見交換や情報交換が活発に行われるものと期待している。